
ニコラと塔

おっとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニコラと塔

【Nコード】

N3372E

【作者名】

おっとり

【あらすじ】

ある所に塔があつた。その塔は天高く、天辺がかすんで見えなくなるぐらい高い。その天辺を目指して、少年ニコラは階段を登る。彼は天辺に辿り着くことはできるのか？そして、そこに何を見るのか？塔を登る少年の成長をご覧あれ。

プロローグ

塔がある。高い、とてつもなく高い塔だ。それは山の頂上に建っていて、雲を串刺しにしながら、天に向かって一直線にのびている。そしていつも、青い空の彼方からみんなを見下ろしている。一体いつ、誰が、何のために建てたのか？ 知る者はいない。調べようとする者も……。塔について聞けば、人々は笑いながらこう言う。

「あるものは、ある！」

最初は調べようとする者もたくさんいた。それこそ、塔の謎は人々の好奇心を一身に集めていた。それはなにも学者に限ったことではなく、大人も子供も、男も女も、農民も商人も牧師や修道女でさえも、みんな塔のことを知りたがった。ある国の王は塔について知りたいあまり、国をあげて塔の調査に乗り出した。「塔の秘密を一つ見つけたものには、金貨百枚を褒美に与える」と言って……。人々はこぞって塔のことを調べた。その結果を持って城に行けば金貨百枚なのだから、夢中で塔のことを調べた。

しかし、塔に夢中になるあまり、人々は仕事を放り出した。互いをライバル視して、いがみ合い、時には殺し合いにまで発展した。夢中になりすぎて寝食を忘れた結果、体を壊して死んでしまった。調べても調べても何も分からず、それでも金貨が欲しくて、平気でウソをつくようになった。国は、めちやくちやになった。

そんなある日、傾国のあり様を嘆いた一人の賢者は、城に行くと王に進言した。

「あの塔は、遙か太古に何者かの力によって創られた、偉大なるものです。しかし、一つの国と万の民に比べれば、取るに足らないものです」

それを聞いた王はやっと事の重大さに気付き、そして自分の国の醜態を見てそれを恥じると、国民を集めて言った。

「もう塔について調べてはいけない！　あるものは、ある！　それが答えだ！」

そんなことがあったからか、いつしか人々は塔のことを調べようとしなくなった。塔について調べるということは墮落の象徴であり、塔について真面目に考えようものなら「あいつはよほどの暇人だ」とか、「頭のおかしな奴だ」と言われて笑われるのがオチだった。そして人々は口をそろえて言うのだ。

「あるものは、ある！」

大人も子供も、男も女も、農民も商人も牧師も修道女も、そして学者でさえもそれは同じだった。

しかし、一人だけそれらとは様子の違う人物がいた。塔が建っている山から少し離れた村に住んでいる、一人の少年だ。「あるものは、ある！」が常識とされている中で、しかし彼は、くる日もくる日も塔のことばかり考えている。一人で、それを見つめながら……。彼は、どうして「あるものは、ある！」と言わないのか？　彼は、何を思っただけで塔を見つめているのか？　この話は、そんな少年の物語だ。

1．もしかしたら…

風が駆け抜けていく。草原の草花や、森の木々に付いた葉がサラサラと音を立てた。それは太陽の光と交わって、緑の絨毯の上に綺麗なグラデーションを描き終わると、静かに去っていく。一変して静かになると、今度は小川のせせらぎに合わせて、鳥達がささやかな合唱を始めた。

草原は穏やかな午後を迎えていた。しかし、今まさに飛びたとうとしたところで、小鳥達はその気配に気付いた。瞬間、体を強張らせてその身を草の中に隠す。様子をうかがっていると、トタトタと忙しい靴音が聞こえてきた。草原を割るようにのびているあぜ道を、一人の少年が走ってくる。腕をふり、足をふり出すたびに、彼の肩から提げられた通学カバンはバタバタと音を立て、そして綺麗な金色の髪がキラキラと光を反射しながら揺れた。学校帰りの彼だが、家に向かっていているわけではない。丘に向かって走っているのだ。丘は、この村で一番見晴らしの良い場所だ。

丘にやって来ると、少年は肩からカバンを下ろし、その場に座りこんだ。大きく息を吸い込むと、草の匂いが鼻をかすめる。上からは暖かい日差し。だから、彼はこの場所を気に入っているのだ。一人でぼんやりと考え事をするには、一番の場所だから。

さて、ぼんやりする準備が整ったところで、彼は視線を北に向けた。そこには山々がそびえ立っている。丘から見える山はサファイアのように青い。少年はそれらを、端の方から順にながめていく。そして彼の視線は、いつもそのうちの一つで止まる。アーキ山……北の山々をトウーガ連峰と言うのだが、その中でも最も標高が高い山だ。しかし、彼は別にその山にこれといって思い入れがあるわけではない。彼が興味を注いでいるのは、その頂上から空に向かってのびている一筋の白い棒だ。いや、棒と言ったらそれは間違いだ。確かに、彼のいる丘から見れば細い棒にしか見えないのだが、しか

し、それは天高くそびえる巨大な塔なのだ。彼はいつも、それを下の方から天辺に向かって流すように見る。しかし、彼の首がわずかに後ろに傾き始めると、白い塔の先は青空に溶けてしまったかのように、かすんで見えなくなってしまうのだ。少年は、今日も見えない塔の天辺を見つめながら溜息をついた。

少年の名はニコラ。今は村で、おじいさんと二人で暮らしている。元々彼はこの村の人間ではなく、東にある都で両親と一緒に暮らしていたのだが、しかし三才になったある日、彼が重い病氣にかかってしまったことから全ては始まった。重い病氣と言っても「不治の病」と言った類のものではなく、薬さえ飲めば治るようなものだった。しかし、その薬がめつばう高価で、ニコラの病氣が良くなる頃には、両親は大きな借金を背負ってしまった。町で普通に働いてはまず返せないような、莫大な金額だった。そこで彼の両親は、ニコラを村に住むおじいさんに預け、「もらい」が良い西の大陸に出稼ぎに行ってしまったのだ。だからそれ以来、ニコラは両親の顔を見ていない。たまに来る手紙だけが、彼と両親のつながりだった。

そんな生い立ちがゆえに、ニコラは人より寂しがり屋だった。しかし彼の場合、普通の「寂しがり屋」とは少し様子が違った。普通、寂しがり屋は人といえることを好むが、ニコラは逆だった。人といえることを避けるのだ。彼は今、村の学校に通っていて、友達も普通の子と同じぐらいいるのだが、しかし、学校が終わっても彼はその友達と遊んだりはいしない。あくまで、学校の中だけでの付き合いなのだ。彼が友達と学校帰りに遊んだのは一度だけ……その時、彼は両親のいない寂しさを忘れ、本当に楽しい時を過ごした……しかし、空が赤く染まった頃、みんなが家に帰りだす頃になって、ニコラはそれまでにないほどの大きな寂しさに襲われた。なぜなら、友達みんな家に帰れば両親がいるから……それを思うと、いっそう自分の状況が浮き彫りになって彼自身を苛むのだ。夕日に照らされなが

ら、彼は一人、目に涙を浮かべながらおじいさんが待つ家に帰った。そんなことがあつてから、彼は学校が終わると丘に来るようになった。丘にいるのはたいい彼一人。寂しいが、それ以上の寂しさに襲われずにすむ。それに、丘に座つて考え事をしていると、残りの寂しさも忘れられるのだ。毎日、夕方まで……それが彼の日課となった。

最初は草花や山のことを考えていた。「あの花は何と言う名前だろう?」とか、「あの山はどれぐらいの高さがあるのだろうか?」とか。しかし、どれもおじいさんや学校の先生に聞けばすぐに答えが出てしまった。答えが出ると彼は困る。考え事のネタが無くなると、寂しさに襲われるからだ。そこで彼はいつしか、北の山に建っている塔のことを考えるようになった。塔のことなら、いくら大人達に聞いても「あるものは、ある!」の一言で終わってしまう。普通、そんな途方もないことについて考えるのは「よほどの暇人」か「頭のおかしな奴」なのだが、ニコラにとっては都合が良かった。あの塔はいつ、誰が、何のために建てたのだろうか? 考えるが、彼には検討もつかない。しかし、だからこそ良い。彼はそうやって、ずっと答えの出ない問いについて考え続けているのだ。

しかしある日、授業が終わり、いつものように丘に行くため、彼が学校を出ようとした時だった。そこを先生に呼び止められた。

「ニコラ、あなたに渡したい物があるの」

そう言つて、先生は自分のカバンから一冊の本を取り出した。「塔の物語」と書かれた古い本だ。

先生はとても優しい人だが、しかしひどくお節介な人でもあった。彼女はニコラが塔について考えていることを知り、「不思議な子だ」と思いつつも、「あるものは、ある!」では満足できない彼のために塔に関する本を探してきてくれたのだ。ニコラにしてみれば大きなお世話だ。彼は別に、塔について知りたいわけではないのだから、いや、むしろ分らないからこそありがたいのだ。しかしそうは言つても、先生が一生懸命探してきてくれた本を、「いいません」と

突き返すわけにもいかなかった。

「ありがとうございます……」

ニコラはとりあえず本を受け取ると、それをカバンにしまってそのまま丘に向かった。揺れるたびにするカバンの音は、いつもより重量感がある。先生のくれた本のせいだろう。

丘に着くと、ニコラはいつもの様にカバンを置き、草の上に腰を下ろした。そして、塔を見つめて考え事を始める……が、今日はどうにも塔と一緒に先生の顔がチラつく。ニコラは横に置いてあるカバンを見た。塔について、彼は別に知りたくはない。しかしもらってしまった以上、本の内容は一応気になった。ニコラはしばらくカバンを見つめたまま、どうしたものかと迷っていたが、しかし最後は好奇心に負けて、カバンから本を取り出した。

さて、ニコラは本を読み始めたのだが、内容は別にどうと言うほどのものではなかった。塔を題材にしたおとぎ話がたくさんまとめられている、それだけの本だ。考え事のネタを失わずにすんだ安心感と、「な〜んだ」とちよつとガツカリしたような感情が彼の中で入り混じった。しかし、別にこの本を邪険にする必要もなくなったので、ニコラはその本を読んでみることにした。不思議な話、ちよつと恐い話、馬鹿馬鹿しい話、色々な物語があつてなかなか面白い。気がつくと、ニコラは夢中で本を読んでいた。ペラペラという本のページをめくる音が、静かな丘に響いた。

しかし、ある物語を読み終えた時、彼はそれまでずっと本に落としていた視線を上げて、青空の中に溶けている塔の天辺を見た。それは、ある男の物語だった。

男には仲の良い恋人がいたのだが、ある日、その恋人が川に落ちて流されてしまった。男は一生懸命恋人を探したが、彼女は見つからなかった。しかし、途方に暮れていたそんなある日、男の元に神様が現れた。そしてこう言うのだ。

「もし、お前がたった一人で塔の天辺まで来ることができたら、恋人に会わせてやろう」

それを聞くと、男はさつそく塔を登り始めた。しかし、塔の中にはたくさんの罠があり、さらに恐ろしい魔物も巣くつていて、男は何度も何度も苦しめられた。が、男はめげず、傷つき、ボロボロになりながらも、「恋人に会いたい」というその一心で登り続けた。そしてついに塔の天辺に辿り着いたのだ。神様は約束通り男に恋人を会わせ、そのまま二人を天上の世界に招き入れた。男と恋人はそこで、未長く幸せに暮らしたそう……

と、そんな物語だった。当然、ただのおとぎ話だ。ニコラはまだ八才にもなっていないが、しかしそれが「ただのおとぎ話」だというくらい分かる。分かるが、しかし彼はまだ八才にもなっていない。「もしかしたら……」と言う思いは消えなかった。もしかしたら……もしかしたら……と、その日彼は、日が暮れるまでそんなことを考えていた。

2・笑う隊長殿

夕食の時間、ニコラはスープを飲みながらチラチラとおじいさんの方を見た。おじいさんは黙々とスプーンを口に運んでいる。家の中には食器とスプーンがぶつかると、カチャカチャという音だけが響いた。外の方で虫が鳴いているのが聞こえるくらい、二人の食卓は静かだった。

ニコラにとって、おじいさんは少し苦手な存在だった。村で大工をしているおじいさんはクマのような体をしていて、さらに、昔軍隊にいた時についた傷が、あちこちにある。顔も、とても人相が良いと言えるものではない。口元とアゴには白い、たわしのようにごわごわとしたヒゲがたくわえられているし、鼻も大きく、ワシのくちばしのような形をしている。そして眉間にはいつも深いしわが刻まれ、洞穴のように落ちくぼんだ目は、奥の方で鋭い光を放っている。その上無口で、こちらから話しかけないかぎり、ほとんど口を開くことはない。村人達からは「頼りになる」と慕われているが、ニコラは初めておじいさんを見た時、思わず泣いてしまった。もちろん、ずっと一緒に暮らしているのだからもう恐ろしいとは思わないが、ニコラはまだおじいさんに話かける時、チラチラとその様子をうかがわずにはいられなかった。しかも、これから自分がしようとしている話のことを考えると、なおさらだった。「塔に登りたいなどと、この世の中でそんなことを言うのは「自分は愚か者です」と宣言するに等しいことなのだから。しかし諦めようかと思うと、そのたびに昼間丘で読んだ物語が、そして「もしかしたら……」という言葉が頭の中に浮かんでくる。

『もしかしたら……』

それは、頭の中で唱えるたびにどんどん塔に登りたくなる、魔法の呪文だった。

「おじいちゃん……」

ついにニコラはスプーンを置くと、話を切り出した。すると、おじいさんの二つの目がニコラをまっすぐに見つめてきた。ニコラは一瞬その眼光にすくんだが、しかし気を取り直して言葉を続けた。

「僕のことを変な奴だと思わないでね」

そう前置きして一呼吸置くと、ニコラは単刀直入に言った。

「僕は塔に登りたいんだ」

おじいさんは目を見開いて、眉の両端を上げた。それからスプーンを置いて、「うーん」と低くかすれた鼻声を出した。

「何でだ？」

少し間を置いてから、おじいさんはニコラに聞いた。普通の親なら、「ダメだ。馬鹿なことを言ってるんじゃない」と一蹴するようなことなのだが、しかしそこを「何でだ？」と理由を聞いたのは、おじいさんが人一倍ニコラを心配しているからに他ならなかった。しかし、ニコラの方は聞かれて困ってしまった。「もしかしたら……」と思う反面、彼は同時に「そんなこと、あるはずない」とも思っているのだから。まさか、「天辺まで登ったら、神様がお父さんとお母さんに会わせてくれる気がする」などと言うわけにはいかない。そんなことは、例えおじいさんにでも恥ずかしくて言えやしない。しかし、ニコラは「もしかしたら……」に賭けたかった。

「とにかく、どうしても登りたいんだ」

ニコラは理由を言わず、ただそう答えた。とにかく真剣だと言うことを分かってもらうため、目だけはおじいさんと合わせて……。

さて、しかし今度はおじいさんが困ってしまった。自分の孫が真剣に塔に登りたがっているのだ。それも観光名所でも何でもない、考えるだけで笑い者にされるような塔にだ。おじいさんは両手を組んで、そこに額を乗せるようにしてうな垂れると、ワシのような鼻からフーツと溜息を漏らした。

「僕のこと、変な奴だと思う？」

おじいさんの様子を見ると、ニコラは少し不安になって聞いた。しかしおじいさんは体を起すと、すぐに首を横に振って、それから

口を開いた。

「塔に登ってどうしたいんだ？」

「天辺まで行きたいんだ。一人で……」

「一人で？」

「そうしないとダメなんだ」

おじいさんには、ニコラの考えていることはさっぱり分からなかった。しかし普段大人しく、あまりわがまを言わないニコラがここまで言うのだから、「ニコラの望む通りにしてあげたい」とも思っていた。しかし、その望みを叶えてやるということはすなわち、ニコラを一人で塔に登らせるということなのだ。おじいさんは腕を組んで、また「うゝん」と唸った。

「もう少し、大きくなってからじゃダメか？」

「待てないから言ってるんだ」

実際、もう数年も待てば彼の両親は帰ってくるかもしれない。しかし、子供のニコラにとって、その数年はあまりにも果てしない長さに感じられた。大げさな話、宇宙が生まれてから今に至るまでにかかった時間と、同じだけの時間がかかるような気がしたのだ。実際はそれに比べれば一瞬も一瞬なのだが、そんな刹那の時間でさえ、彼は待てるわけがなかった。

「うゝん……」

おじいさんはまた唸った。そして、それ以降一切の言葉を口にせず、黙りこんでしまった。深い眉間のしわはより深くなっている。ニコラはそれを見ると、「僕はおじいちゃんを困らせているんだ」と気付いた。

「ダメなら良いんだ……」

ニコラはそれだけ言うと、食器を片付けて自分の部屋に向かってしまった。

分かっていた。子供の自分が塔を一人で登るなんてことは、危険なことなのだ。それにニコラは感謝していた。おじいさんは「ダメだ！」と言わなかった。頭ごなしに「馬鹿なことを言っな！」と

言わなかったのだ。「うーん」と唸って考えてくれた。そのことは嬉しかった。

しかし、残念と言えば残念だった。それから数日、叶わぬ願いを胸に秘め、彼は悶々とした日々を過ごしていた。ニコラの「塔に登りたい」と言う思いは変わっていなかった。いやむしろ、丘に行つて塔を見つめるたびに、その思いは大きくなつていった。

しかし、数日後の朝、ニコラはおじいさんに起された。朝日に照らされたおじいさんの顔はどこか穏やかで、ニコラは一瞬、それが誰だか分からなかった。そうして、ぼーっとしている彼に向かって、しかしおじいさんは言った。

「ニコラ、塔へ行こう」

ニコラは目を丸くした。

ニコラが「塔に登りたい」と言った日、おじいさんはニコラが寝てからもずっと考え込んでいた。一体、ニコラにどうしてやれば一番良いのか？ 塔に登らせてやればニコラは喜ぶに違いなかった。

しかし、塔の天辺は天高く、山の頂上すら低く思えるほどの高さにある。一日で登りきれものではない。十分な食料と水を持たせて登らせるにしても、ニコラはまだ幼い。何か不都合が起こった時に冷静な判断をし、適切な行動を取れるとは限らない。一緒に登つてやればそれが良いのだが、ニコラは「一人で」と言った。それにも、何か理由があるに違いないのだから、一緒に登ることもできない。

「うーん……」

おじいさんはまた低く唸った。ニコラの身のことを考えれば、登らせない方がよい。それは明らかなことだった。しかし、おじいさんはさっきの、「ダメなら良いんだ……」と言って部屋に戻つていったニコラの顔を思い出した。一応取りつくろつて笑顔ではあつたが、しかしとても残念そうな表情だった。ニコラの身のことを考えれば、塔に登らせない方がよい。しかし、それが果たしてニコラの

心のためになるのか？ おじいさんは薄暗い部屋の中で一人、頭を抱えて唸った。その時だった……

『できないなら、諦めるしかない』

突然、そんな言葉がおじいさんの頭の中に浮かんできた。誰の言葉だったか？ おじいさんは思い出そうと、自分の記憶を掘り下げていった。すると、次第に声の主の輪郭がはつきりしてきて……そう、それはもう何十年も前のことだ。

もう何十年も前、戦争があつて、若かったおじいさんも軍隊に借り出されて戦地へ行った。そんなある日、おじいさんの部隊がいた砦が敵に包囲されてしまった。敵の部隊はおじいさん達よりも三倍は大きなもので、そのまま立てこもって抵抗しても、結果は目に見えていた。「覚悟を決めてここで死ぬか？」と、おじいさんはそう思った。しかし、その時だった……

「この砦はもうダメだ。いくら頑張っても、二日で敵の手に落ちるだろう」

そう言ったのは部隊長だった。

「そこで私は武器と食料を持ってここを抜け出し、北の砦に合流しようと思う。皆もついて来るだろう？」

その言葉を聞くと、おじいさんは首を横に振ってから答えた。

「無理です隊長殿！ 砦は完全に包囲されています。抜け出せません！」

「だから、見つからないように夜の闇に紛れてだな……」

「無理です！ 絶対に見つかります！」

おじいさんは声を荒げて言った。しかし、部隊長はそれを聞くと笑い出し、それから続けて言った。

「そうだな、見つかるかもしれん。ただ、その時はその時だ。できないなら、諦めるしかない。だが、『挑まざる諦め』より、『挑ん

でからの諦め』の方が価値あるものだとは思うぞ？」

そう言って、部隊長はまた、「ハッハッハッ」と大声で笑った。

結局、その日の夜に部隊長とおじいさん達は武器と食料を持って砦を抜け出した。運良くその夜は大雨で、雨音に紛れて敵の間をすり抜けることができた。後になって部隊長は「玉砕覚悟だったのに、死に損なったわ！」と言って、また大声で笑っていた。

それは、おじいさんにとって古い、古い思い出だった。静かな夜だったが、おじいさんの耳には「ハッハッハッ」と、部隊長の笑い声が聞こえてくるようだった。まるで、「お前はまた挑まずに諦めようとする気か？」と言われていたようだった。

おじいさんは心を決めた。「ニコラを塔に登らせてやろう」と……。しかし、挑んで玉砕するのが自分なら良いのだが、直接塔に挑むのはニコラだ。ニコラが無事に帰ってこれるように、玉砕しないようにするにはどうしたら良いか？ おじいさんは今度はそのことを考え始めた。次の日も、そのまた次の日も考えた。

そして数日後、おじいさんは言ったのだ。

「ニコラ、塔へ行こう」

3・山頂から見上げる場所

その日は太陽が眩しい、気持ちの良い日だった。二人はリュックを背負って家を出た。塔があるアーキ山の山頂までは、おじいさんも一緒だ。二人はまず学校に寄って「数日休む」と先生に伝えると、それから北に向かって村の道を歩きだした。あぜ道は家々の間を、緑の原っぱの間を、森の間をぬって、山の麓までずっと続いている。視線の先に見えるトゥーガ連峰……元々は一つの山だったらしいが、噴火や崩壊を繰り返すうちにいくつもの峰に分かれた……らしい。それは塔ができるよりもずっと前のことで、実際のところは良く分かっていない。今はただの死火山だ。

その荘厳な姿を目にしながら、ニコラとおじいさんは歩いた。昨日降った雨のせいか、景色はキラキラと輝いて見えた。そして昼頃になると、二人は山の麓にある町に辿り着いた。カノン・ダラーという、石造りの綺麗な町だ。建物や石畳に使われているのは山で採れた石灰岩。それが太陽の光を照り返すので、ニコラは目を細めながら歩いた。二人は町の小食堂で昼食をとると、それから商店街に向かって、買い物をした。カノン・ダラーはトゥーガ連峰の入り口となる町で、山を越えて北に向かう者や、また山に登ろうとする者の行き来が絶えない。そしてそういった人々のおかげで栄えてきた経緯があるので、この町の商店街では山登りに必要な物は全てそろっている。おじいさんは、缶詰などの日持ちする食料をたくさん買って、それから最後に砂糖菓子を買ってニコラに持たせてくれた。

そして午後になった頃、二人はカノン・ダラーを出発した。まず二人が足を踏み入れたのはアーミীগ山。カノン・ダラーはトゥーガ連峰の中でも、この山の麓に位置しているので、どの山に向かう人間も、まずこのアーミীগ山に入る。カラマツやシラカンバの間をのびる山道は整備されていて、枯葉と土が踏み固められた地面は、歩くたびにサクサクと小気味良い音を立てた。行き交う人々も多く、

気の良い者は「こんにちわ」などと挨拶してくる。ニコラはそれに元気良く「こんにちわ！」と返し、おじいさんも軽く頭を下げた。

二人は時折岩に腰掛け、休憩をとりながら進んだ。坂を上り、小川を越え、そして日が西に傾いた頃、二人は山小屋までやって来た。夜の山道を歩くのは危険なので、二人はそこで一泊することにした。他の旅人達も多く利用するその山小屋はにぎやかで、夕食に出されたシチューはとても美味しかった。

次の日の朝、日の出と共に二人は山小屋を出発した。二人が向かったのはゴンゲナ山、アミーガ山の北に位置する山だ。塔があるアーキ山に行くには、このゴンゲナ山を越えなければならない。しかし、このゴンゲナ山を通るのはアーキ山に行く用事がある者だけ、すなわち、塔に行くような人間だけなのだ。そして、きょう日塔に向かおうとする人間など皆無に等しいため、山道は荒れ果て、ニコラとおじいさんはほとんど道無き道を進まざるを得なかった。

ゴンゲナ山に入ってから、ニコラはキョロキョロと周りを見ることが多くなった。昨日までいた旅人達は、ゴンゲナ山ではない方へ向かってしまったので、山にいる人間はニコラとおじいさんの二人だけだ。おじいさんは無口なので、ニコラの耳に入ってくる音と言えば、草木のざわめく音と、時折聞こえてくる「ココココッ！」と言う音だけだった。何の音だろうか？ 気になって聞くと、おじいさんは「キツツキだ」と教えてくれた。そして、また静かになった。山道はだんだんと急になってきた。ゴンゲナ山の山頂に近付いてきたからだ。さっきまであったカラマツやシラカンバはもう見当たらない。ハイマツなどの背の低い樹木や、ニコラの見た事もないような草花が辺りを覆っていた。アーキ山に向かうには、ゴンゲナ山の山頂を経由するのが最短ルートだ。わざわざ山頂を通らずに、山を迂回するルートもあるが、そちらは時間がかかる。アーキ山までは山小屋が無いので、今日中に塔まで辿り着くには、疲れるがこのルートが一番良いのだ。二人は汗を拭きながら、水筒の水を飲みな

がら、そしてニコラは昨日買ってもらった砂糖菓子を口の中で転がしながら、山頂を目指して歩いた。

二人は南側から登っていたので、今まで山が邪魔でそれを見ることはできなかったが、しかしゴンゲナ山の山頂に來ると、ついにそれは目の前に現れた。北側に見える岩だらけの峰、アーキ山の山頂からは、天に向かって白い石造りの塔がのびている。なるほど、カノン・ダラーの建物や石畳と同じで、この山で採れた石灰岩を使っているらしい。しかし、そのいつも見ているはずの塔に、その時ニコラは圧倒された。村で見ていた時は、それはただの棒ぐらいにしか見えなかった。ニコラの想像では、村にある風車小屋ぐらいの太さだと思っていたが、しかしこうして近付いて見るとそれは恐ろしく巨大だった。風車小屋など本当に小屋にすぎない……一つの城と言っても良さそうな大きさだった。それが天に向かって、それこそ天辺がかすんで見えなくなってしまうぐらいの高さまでのびているのだ。塔の天辺を求めて首を後ろに倒して行くうちに、ニコラはバランスを失って尻餅をついてしまった。

「さあ、行こう」

そんなニコラに向かって、おじいさんは手を差し伸べながら言った。ニコラはまだ塔の迫力に気圧されていたが、しかし脚に力が入れると立ち上がり、そしてアーキ山に向かって歩きだした。ゴンゲナ山の山頂からアーキ山までの道は岩だらけだった。たまに植物がちらほらあるだけで、あとは岩だらけ。村から見える山々は青い宝石のように見えるのに、間近で見るとそれは何とも殺風景だった。しかしその分、余計に塔が目立つ。ボコボコした岩の道、ニコラは何度も上を仰ぎ見て、そして何度もつまずいて転んだ。そんな事を繰り返すうち、二人はまだ日が高いうちにアーキ山の山頂に辿り着くことができた。

山頂から見る周りの景色は壮大で、ゴンゲナやアミーガの山頂すら下の方に眺めることができた。所々に浮く雲の下には遠くの町や村を見つけることができる。「あの辺りが自分の村だろうか？」と、

ニコラは目を凝らして見た。しかし、そうして下界に目をやりながらも、やはり気になるのは背後にある巨大な塔の存在だった。ただならぬ気配に照らされ、ニコラは思わず振り返り、そしてそれを仰ぎ見た。もう、首を傾けた程度では天辺を見ることはできない。ニコラは思いきつて岩の上に寝転がると、真上を見た。空は澄んでいた。綺麗なコバルト色……しかし、その中を白い塔は一直線に、どこまでも、見えなくなるまでのびている。村から見たら、ニコラは今雲の上にいる。しかし、塔はそんなニコラを嘲笑うように、さらなる高みから彼を見下ろしていた。

「おじいちゃん、塔はすごく高いよ」

体を起すと、ニコラは溜息混じりに言った。

「僕はこれから、世界一高い場所に行くんだね」

「ああ、だから今日はゆっくり休め。登るのは明日からだ」

おじいさんの言葉を聞くと、ニコラはまた岩の上にゴロンと横になり、そして塔を見た。塔の天辺が溶け込んでいる青空はどこまでも綺麗で、しかし、やはりそこはかすんで見えなかった。

4・一喜一憂

そして、ついにその時はやって来た。

塔は、ちょうど丸い煙突のような形をしていて、その煙突の内壁に沿うように、らせん状の階段が上までぐるぐるとのびている、という構造だった。塔の中心部、らせん階段の内側は何もない空間で、上までずっと吹き抜けになっている。ニコラはその中心に立って、フツと上を見上げた。所々にある光を取り込むための窓のおかげで、上の方まで見渡すことができた。らせん階段はぐるぐると渦を巻いて、視界の真ん中で小さくなって消えていた。果てしない高さを実感し、ニコラはゴクリと生唾を飲んだ。

そうしていると、そこにニコラのリュックサックを持っておじいさんがやって来た。中には食料がたくさん詰め込まれており、それから大きな水筒が二つ入っていた。水筒の一つは「登り用」、もう一つは「下り用」だ。さらにおじいさんは、暗くなった時のためのランプと、寝る時に使う小さな毛布を一枚くり付けて、そのリュックをニコラに背負わせてくれた。背中がズシリと重たくなって、ニコラは一瞬よろめいた。しかし、それだけ準備が整っているということなので、なんだか安心する重みだった。ニコラは「よいしょ」と言ってリュックをしっかりと背負い直すと、らせん階段の一段目がある所に向かった。そして、そこで改めて階段を見上げた。そこにあるのは幅十メートルはあろうかという、立派な石造りの階段だった。ニコラは大きく息を吸い込んで、それから振り返るとおじいさんの方を見た。

「それじゃあ、行ってくるね」

「ああ、待ちなさい」

しかし、階段に足をかけたのと同時に、ニコラは呼び止められた。「登る前にこれだけ約束しなさい……」

「約束？」

ニコラが聞き返すと、おじいさんは珍しく大きな声で、良く聞こえるように言った。

一つ、食料は少しずつ食べること。

二つ、水分補給は小まめに、しかし一度にたくさん飲まないこと。
三つ、暗くなったら登るのをやめて、しっかり休むこと。

四つ、五日目の朝が来ても天辺に辿り着けなかったら、迷わず下りてくること。

それがおじいさんからの約束ごとだった。「玉砕覚悟ではダメなんだ」と、数日間考えて作ったニコラのための四か条だ。

「分かったよ。約束する」

ニコラはニッコリと微笑んでうなずくと、そう言った。そしておじいさんに再び背を向けると、彼はついに階段を登り始めた。コツコツと軽快な靴音を響かせながら、ニコラは一段、また一段と歩みを進めた。目指すはひたすら上、ぐるぐる渦巻きの中心部分だ。「そこに絶対に辿り着くんだ」と、ニコラは勇んで登り続けた。トントントンと登っていき、そしてしばらくそれを繰り返すと、時々階段の内側にある柵から身を乗り出して下を見た。すると、下で見上げているおじいさんと目があつた。

「おじいちゃん!」

ニコラが手を振ると、おじいさんもそれに応えて手を振った。それを見ると、ニコラは嬉しくなつて、またずんずんと階段を登った。下の方には、もう小さく見えるが、しかし力強い味方がいるのだから、ニコラはどんなに階段が続こうと登りきれる気がした。

そうして小一時間ほど登った時だった。ふと上を見ると、ニコラはそれに気が付いた。階段の描く渦の中心がさっきより大きくなっていることに……。 「この塔の天井だ」と、ニコラはすぐにそう思った。ここまで順調に登り進めて来たから、さすがの塔も根負けし、ニコラ様の前に白旗を掲げたのだらう……と、そんなことを考えな

がら、彼は走るように、タツタツと一気に階段を駆け登り始めた。すると、次第に渦の中心がはつきりとしてきた。その白い色は、この塔の材質である石の色だった。やはり、それは天井らしい。ニコラは乱れた息もろくに整えず、無我夢中で階段を登った。そして彼はついにはさんの最後の一巻きに入ると、それを見た。天井には小さな穴が開いていて、階段はそこに吸い込まれていた。その向こうに広がっているであろう青空を思い浮かべながら、ニコラは両腕と両足を思い切り振りまわして、残る段を駆け上がった。

しかし、そこにあのコバルト色は見つけ出せなかった。あるのは先ほどと同じ色、少し黄ばんだ白だけだ。ニコラは啞然としながらも、次の瞬間ハツとして上を見た。そして彼はがく然とした。そこにあつたのはまた、果てしないぐるぐる渦巻きだったのだ。

この塔の構造はこうだ。大きな円筒の上に、それより少し細い円筒、その上にはそれよりもさらに細い円筒、そしてその上にはそれよりもさらに細い……そう、いくつもの円筒が重なっているのだ。それは、丸い棒状の積み木を一直線に、高く積み上げた図にも似ているだろう。そして、下の円筒と上の円筒との間には、それを区切る天井、いや、床が存在する。この天井であり床であるものを「フロア」と呼ぶなら、ニコラは今それをくぐり、そしてその上に立つたことになる。つまり、ニコラは一つ目の円筒を登りきったにすぎず、彼が今いるのはいくつもあるフロアのうちの一つにすぎないということなのだ。

再びらせんの渦を見つけて、ニコラは走ってきたこともあり、どつと疲れてしまった。フロアはちょうど休憩にはぴったりの場所だったので、ニコラはしばらくそこで休むことにした。リュック下ろし、壁にもたれかかるように座りこむと、水筒を出して少しだけ水を飲んだ。体の内側が急に冷えて、逆に汗が噴き出した。心臓のドクドクという鼓動の音もよく聞こえる。これが治まったら出発しようとして決めて、ニコラはすーっと深呼吸してから、もう一口だけ水を飲んだ。

休憩を終えると、ニコラはまた登り始めた。何も考えず、ただ目の前にある一段に足をのせ、体をその上に移動させたら、またその上の一段に……その繰り返し、短調な作業だった。喉が渴いたら階段に腰掛け、水筒を取り出して一口だけ水を飲む。息が整ったらまた、左、右、左、右、と足を動かす。そんなことが何時間も続いた。太陽は直接見えなかったが、窓から差し込んでくる光から判断すれば、もう午後だろう……と、そんなことを考えているうちに、ニコラはその日三つ目の天井に辿り着いた。彼は恐る恐る、ゆっくりと階段を登った……。しかし、それはまたフロアだった。そして上にはまた、次の渦が待っていた。

四つ目の渦巻きの中で、ニコラは足を動かしながらも考えた。「あと何回、あの天井を見れば良いのだろうか?」と……。二回、三回ならありがたい。十回くらいなら、がんばれるだろうか? しかし、百回だったら? いや、そもそも終わりなど存在しない、無限に続く階段だとしたら? 「どうしよう?」と、ありもしないことを考え、ニコラはたちまち心細くなって思わず下の方を見た。下もまた、果てしない渦巻きに変わっていた。

「おじいちゃん!」

叫んだ。しかし、返事は無かった。

結局その日、ニコラは四つ目のフロアに辿り着いたところで登るのをやめた。ちょうど日も沈んだから、おじいさんの四か条を思い出したから、そして、何よりひどく疲れたからだ。暗くなった塔の中で、ニコラは缶詰を一つ開けて食べると、そのまま毛布に包まって静かに寝息を立て始めた。

5・神様がいらなくても

塔を登り始めて、二日目も終わろうとしていた。徐々に明るさを失っていく塔の中を見つめながら、ニコラは階段に腰掛けて休憩をとっていた。上に行くにつれ細くなっている塔……その内壁はいくら狭くなってきたか？「結構上まで来たのかもしれない」と思いつつ、しかしニコラは溜息をついた。この塔に、若干嫌気がさしてきたからだ。最初は確かに、塔も、階段も、それが描く渦巻きも、全てが物珍しくて、ニコラはまるで絵本の中の勇者になった気分であわわくと胸を躍らせながら登っていた。しかし、冒険の舞台はその巨大さだけが取り柄で、言い方さえ変えれば白い石細工にすぎなかった。二日も同じものを見せられ続けては、さすがに殺風景に思えてくる。

退屈とは恐ろしいもので、心が飢えると体も調子が悪くなってくる。実際、ニコラの登るスピードは確実に落ちていた。「これではいけない」と、何か変化を求めて、ニコラは登りながら色々やってみた。例えば、階段の段数を数えてみたり、または一段飛ばしに登ってみたり……しかし、どちらも精神的、ないし肉体的に疲れるので途中でやめてしまった。結局残ったものと言えば、わけの分からない虚しさだけだった。

「おじいちゃん、今頃何してるかな？」

ふと、ニコラは自分の遥か下で待っているであろう人のことを考えた。「食事をしているか、それとも昼寝をしているだろうか？」と……。すると、それを皮切りに色々な人のことが頭の中に浮かんできた。先生、友達……両親と離れ離れに暮らしているが、何だかんだで自分の周りにはたくさん人がいたのだと、彼は思った。

そんなことを考えながら、ぼーっと休憩しているうちに日は沈んだ。暗くなったからランプをつけて、ニコラはとりあえず、次のフロアまで行って休むことにした。空気が冷えてきたのか、靴の音が

コーンコーンとよく響いた。それ以外に音は無い。今彼は、本当に一人ぼっちだった。

気がつくと、ニコラは何も無い、真っ白な世界に立っていた。見渡してみても、彼以外の何ものも存在しない……いや、遠くに一つだけ、黒い何かが見えた。そしてそれは、次第にニコラの方に近付いてくる。真っ黒な、ドロドロした何かだった。何かは分からなかったが、ただ一つだけ、直感的に分かることがあった。「絶対にあれに捕まってはダメだ」ということ。彼は慌てて逃げ出した。振り返って見ると、黒い何かは、しかしニコラの後ろを依然と追いかけてくる。それを見ると、彼は血相を変えた。

「おじいちゃん！ 先生ー！」

助けを呼ぶが、誰も応えてはくれない。ここにいるのはニコラとドロドロだけ……と、そうしているとバランスを崩して、ニコラは転んでしまった。「痛たた」と、すりむいた膝小僧を押さえつつ、彼は起き上がるとした。が、そこを後から捕まえられた。ニコラは、ついに黒いドロドロに呑みこまれてしまった。

「わあ！」

暗い塔の中で、叫び声がこだました。ニコラは毛布をはねのけて起き上がっていた。「はあ、はあ」と、彼の息は荒い。それは、恐ろしい夢だった。

息が治まってくると、ニコラの耳には「ゴー」という、何か、禍々しいものの鳴き声のような音が聞こえてきた。何かと思い、ニコラはそれが聞こえてくる、上の方を見た。風の音だった。外を吹く風が窓から塔の中に入りこみ、逃げ道を探してぐるぐると回る音だった。しかし、それを聞くニコラの目に映ったのは、階段の描く渦巻きではなかった。そこにあったのは、どこまでも続く果てしない闇だった。飛び起きたは良いが、しかしまだ夜中だったらしい。

闇を見つめながら、ニコラはハッと思い出した。さっき見た夢に

出てきた、黒いドロドロを……。あれが何だったのかは分からない。夢とはたいいてい意味不明な内容のものだ。しかし、意味不明だからこそ、子供には恐怖なのだ。ニコラは、あのドロドロが今にも闇の中から襲いかかってくるような気がした。体中が冷たくなり、手足がガクガクと震えだす。ニコラは「そんなことあるわけない」と頭の中で念じた。目をつぶりながら、先生が教えてくれた楽しい歌を口ずさんだ。しかし、彼が恐る恐る目を開けてみた時だった。

「グオオオオオオオオオ！」

と、それは、突風が奏でた自然の轟音だった。しかし、ニコラにとってそれは、彼を捕って食おうとする化け物の咆哮に他ならなかった。化け物はこう言っている。

『ニコラ！ お前を頭から食ってやる！』

「うあああああああ！」

と、ニコラは思わず叫び声を上げて走り出した。「あのドロドロが来る、逃げなきゃ！」と、下にくぐり階段に駆け込んだ……。が、彼は目の前を見て絶望した。そこにもまた、底無しの闇が広がっていたのだ。ニコラはそれを見ると思わず腰を抜かし、その場にへたり込んで、そしてとうとう泣き出してしまった。必死で目をつぶって、耳を両手で塞いで、声を出さずに静かにすすり泣いた。そして思うことは、ただ「帰りたい」ということだった。両親はいないが、おじいさんがいる。学校にいれば優しい先生がいて、友達もいる。丘の上に座って辺りを見渡せば、色とりどりの景色がある。塔の中には無いものがいっぱいあるのだ。

しばらくすると、風がやんだのか塔の中は静かになった。ニコラはそれに気がつくと、立ち上がり、そして元の場所に帰って毛布を被った。「朝になったら塔を下りよう」と考えながら、そっと目を閉じる……。しかし、震えて、叫んで、泣いているうちに頭がすっかりさえてしまったので、眠れなかった。ニコラはのそりと起き上がるとリュックから水筒を取り出し、そしてごくごく飲んだ。おじいさんの四か条のうちの一つ……。それを破って、思い切り飲んだ。

喉がうるおうと気持ちも落ち着いた。しかし、まだ眠くならないので、ニコラは闇を見つめながら考え事を始めた。この塔はいつ、誰が、何のために建てたのか？ それは丘でいつも考えていた、答えの出ない疑問だった。実際にこうして登ってみたが、分らないものは分からいままだった。だから、ニコラはいつもと同じように色々と空想してみる。

いつ？ 三千年前ぐらいだろう。

誰が？ きつと神様だろう。

何のために？ 人間に与えた試練だ。

と、そこまで考えて、ニコラはそれが前に読んだおとぎ話の内容と同じであることに気が付いた。おとぎ話は良い。彼はその類の読み物が好きだった。昔、本当に小さかった頃、眠れないときはお母さんとおとぎ話を聞かせてくれた……。「そうだ、暇つぶしにおとぎ話をしよう」と、ニコラはあの話をもう一度、思い出しながら朗読し始めた。「昔々、ある所に……」と、ニコラの声は闇の中で跳ね返り、自分に語り聞かせていた。

そして、話は男が塔を登っていく件まで進んだ。男は魔物や罨によつて傷を負い、もう全身ボロボロだった。自分で物語をしながら、同時に「もう登るのをやめて、下りれば良いのに……」と、ニコラは主人公の男に対して思った。しかし彼の親切な忠告も、おとぎの国の男には届かなかつた。どんなに苦しくても、辛くても、男は「恋人に会うんだ！」と、もう動けないはずの体にムチ打って登り続けた。決して、諦めなかつた。

ニコラは朗読をやめた。そして、どうして自分が塔に登り始めたのかを、もう一度思い出してみた。「もしかしたら、神様が願いを叶えてくれるかもしれないから」と、そう思つて登り始めた。いや、もつと言え、両親に会いたかつたから、両親のことを想っていたから……。もちろん、神様というのはおとぎの国の住人だ。天辺ま

で行っても、それはいいかもしれない。いや、いいだろう。しかし、だからといって、ここで引き返すのは少し違う気がした。物語の中の男は、「恋人に会わせてやろう」という神様の言葉によって塔を登り始めたが、しかしそれは、神様のために登ったのではなく、恋人のために登ったのだ。恋人への想いが本物だったから、最後まで登ることができたのだ。そしてそれは、紛れもなく愛なのだ。ニコラはもう一度考えた。「ここで引き返したら、僕はお父さんとお母さんを愛していないことになってしまふんじゃないか？」と……。確かに、神様はいいかもしれない。しかし、そんなことはもうどうでも良いのだ。両親のために塔を登り、そして何年後かに再び会えた時、胸を張ってそのことを話せるように、この塔を最後まで登らなければならないのだ……と、ニコラはそう考えた。

ニコラは決心した。ちょうどその頃、夜が明けたのか闇は晴れ、目の前にはまた、渦を巻くらせん階段が現れた。それは上へ、上へと伸びていた。

6・恋しい場所

ニコラの脚は快調だった。それはもう、弱虫で寂しがり屋な男の子のものではなく、ただひたすら天辺を目指す、強靱な男のそれだった。一步一步が力強く、石の階段に「ミシリ」と悲鳴を上げさせた。

塔を登り始めて三日目となったその日、ニコラは一日でかなりの高さまでやって来ることができた。それは、かなり狭くなった塔の内壁や階段の幅を見れば、一目で分かった。それはコバルトの空が近付いていることの証明であり、そしてニコラの心を奮い立たせる音をなさない声援であり、激励だった。彼は石造り無口な応援団に応えようと、また力強い一步を踏み出した。

そうこうしているうちに、塔の白い壁がほんのりと桃色に染まり始めた。それは、別に塔の色が変わったわけではなく、窓から差し込む光によるもので、その時、塔の外は綺麗な夕焼けに染まっていた。ニコラは一瞬、その美しい光の色に溜息を漏らしたが、しかし次の瞬間、また上の渦巻きに目をやり、気を引きしめると階段を登り始めた。目指すは次のフロア。ニコラはトントンと登っていく。

桃色に染まった壁や階段は、次第に紫、ナイトブルー深青、と色を変えていった。もう夜は目の前まで来ているらしく、ニコラの足元も見えにくくなってきた。「そろそろランプをつけようか？」と、彼は足を動かしながら考えた。

しかしその時、彼の足裏を妙な感覚が襲った。それまで足の裏にあったのは硬く力強い反発だったのだが、しかしそれが、一瞬フワリと浮くような感覚に変わったのだ。「何だろうか？」と、考える間もなく、聞こえてきたのはガラガラという音。そして、ニコラの視界はぐるぐると回転した。全ては一瞬の出来事だ。ガツンガツンと体を打たれながら、ニコラはやっと状況を飲み込んだ。もろくなっていた階段の一部が崩れて、バランスを失った彼の体は、らせん

階段の上をゴロゴロと転がり落ちているのだ。ニコラは何とか止まろうと、体に力を入れて踏ん張ってみたが、しかし重いリュックを背負っている上、一度勢いがついた回転はなかなか止まらず、結局彼は、階段内側の柵に背中からぶつかるまで止まらなかった。

静かになって、視点が一つに定まった。あちこち痛む体に、ニコラは思わず「うう」と唸り声を上げた。「今日は順調だったのに、最後の最後でとんだ目に遭ってしまった」と、今ぶつかったばかりの柵にもたれながら、彼は溜息を漏らした。しかしその時……それは「また」だった。また、ニコラはさつきと同じ、フワリと浮くような感覚に襲われた。それも今度は背中……もたれかかっていたはずの柵が無くなったのだ。

「うあ！」

と、声を上げながら、ニコラは両手を階段にベタリと張りつけ、おなかに力を入れた。さつきと違い、後ろには何も無い。そのまま体を重力に従わせれば、渦巻きの底へ真っ逆さまだ。ニコラは思い切り歯を食いしばって、全身をガタガタ震わせながらも階段に戻るうとした。しかし、ここぞとばかりにリュックが「重力との共存」を主張するのが憎かった。それは、ニコラとリュックの綱引きだった。負けるわけにはいかないニコラは、「あああああ！」と声を震わせながら、手の爪を目一杯石の階段に食い込ませて、これでもかというぐらいの力で踏ん張った。

数秒後、「綱引き」に勝利したのはニコラだった。荒い息を整えながら、彼はふと、自分が今まさにいた場所を振り返って見た。柵が綺麗に崩れ落ちている。ニコラはゾツとした。心臓がバクバクと大きく揺れ動き、全身から汗が噴き出した。なのに、まるで冬の荒野にるように寒い。体が自然にガタガタと震えた。目の前にあったのは、ぽつかりと開いた「死の世界」の扉だったのだ。

それからしばらく、ニコラは階段に座って心を落ち着かせた。恐ろしい目にあつたが、「これも試練なんだろう」と、そう思うことにした。そして落ち着くと、ニコラはランプをつけた。最初に階段

がもろくなっていることに気付かなかったのが、今回のミスだ。」「暗い時は、ちゃんとランプをつけないとダメだ」と、彼はおじいさんの四か条に一つ付け加えた。「急がば回れ」と、学校で教わったことわざが思い出された。

気を取り直して……と、ニコラは階段を登ろうと立ち上がった。

しかしその時、彼は右の足首に違和感を覚えた。痛いとか、うまく動かないとかそういうことではないが、しかし足首のあたりに、何かズーンと重たい感じがあるのだ。転げ落ちた時にひねるかどうにかしたらしい。しかし歩くことはできるので、ニコラは不安を感じつつも、次のフロアに向かって階段を登った。

しかし、塔を登り始めて四日目の朝、足首の違和感のはつきりとした痛みに変わっていた。それでもまだ歩けないほどではないが、しかし、登ろうと踏ん張るたびに、それはズキンと痛んだ。ゆっくり登ればそれほど痛くはないが……しかし、そうすると問題になってくるのはおじいさんの四か条だ。すなわち、「五日目の朝になっても天辺に辿り着けなかったら、迷わず下りてくること」。つまり、今日がラストなのだ。

不安はそれだけではない。あのドロドロのお化けの悪夢を見た時、水筒の水をガブガブ飲んでしまったので、二つある水筒のうちの一つは、もう水が残りわずかだった。もう一つはまだ一杯だが、しかし、それを飲んで良いのは塔を下りるときだ。下りるにも同じだけの時間がかかるからだ。日が沈むのが先か、それとも水が尽きるのが先か……そのどちらよりも早く、ニコラは青空を見なくてはならないのだ。ニコラは脚に力を入れた。ズキンと痛む……しかし我慢した。

すると、また天井が見えてきた。「できれば、あれが最後であって欲しい」と、ニコラは願いながら登った。だんだん天井が近付いてきて、そしてそこをくぐり抜けると……フロア。そして、上にはまた渦巻き。それは「ニコラ君、残念でした」と笑っているよう

だった。ここまでの四日間で、この渦巻きは色んな顔をニコラに見せてきたが、今の顔が一番彼の勘に障るものだった。頭に血が上って、ニコラはズンズンと塔を登った。怒りのせいか、痛みは感じなかった。

すると、また天井が見えてきた。ニコラは拳をぎゅっと握り締め、祈るように登った。登って、くぐった。

『ニコラ君、残念でした』

そこにあつたのは相変わらず挑発的な渦巻きだった。怒りを通り越して、今度ニコラは不安になった。夏の空にどこからともなく現れた夕立雲のように、それはニコラの心を覆っていく。すると、なんだか気持ちが後ろ向きになっていった。怒りに任せてズンズン登ってきたせいで、足首がまた痛くなってきた。水を節約していたので、喉がすごく渴いた。目に映るもの、壁にできた染みや影でさえ「無理」「諦める」という文字に見えてきた。心が押しつぶされそうだった。胸がしめつけられるようで、それは肉体の苦痛より深刻だった。ニコラは一步も踏み出せなくなって、そして、ちょうどその時日が暮れた。

闇の中に沈んだ階段の上に腰を下ろして、ニコラはただ黙って考え事をしていた。この四日間のことを……色々あつた。初めてくぐったフロアでがっかりした。恐ろしい夢を見て泣いた。転がり落ちて怪我をした。拳句、天辺には辿り着けず、朝日と共に下り始めなければならぬと言うのに、こんな所に座りこんでいる。散々だ……。

しかし、残念ではあつたが、ニコラは少しホッとしていた。明日になったらここを下り始めて、そしてみんなのいる場所に帰れるのだ。ニコラは今回のことで気付いた。「自分は決して一人ぼっちではない」ということに……。それを思えば、塔の天辺よりも、むしろ村の方が恋しかった。

ニコラはそのまま、階段の上で横になった。そして、四日間の疲れをとるため、彼はゆっくりとまぶたを閉じた。まぶたの裏には、

緑の絨毯が映っていた。どこからか漂ってくる草の匂いに誘われて、
彼はそのまま眠った。

7・同じ景色の中にある

ニコラはまた、丘の上にいた。風も、木の葉がざわめく音も、草の匂いも、全てが心地良い。キラキラと光を反射して流れていく小川、それに沿って北に視線を流せば青く輝くトウーガ連峰の山々が、そして塔が見える。大好きな場所で、ニコラはまたいつものように考え事を始めた。彼だけの、一人だけの時間だった……。

ニコラは目を覚ました。彼の体の下には、冷たい石の階段があった。どれだけ眠っていたのか分からないが、しかし辺りはまだ暗闇に閉ざされていた。ニコラはもう一度眠ろうかとも思ったが、しかし、目をつぶってもあまり眠る気にはならなかった。妙にすっきりした気分だった。大好きな場所の、丘の夢を見たからかもしれない。朝が来て、塔を下りて村に帰れば、好きなだけ丘に行くことができる。

しかし、丘のことを考えたとき、ニコラは何か心に引っ掛かるものを感じた。そもそも、ニコラが丘を好きな理由は何だったか？そう、「自分だけ両親がいない」という寂しさから逃れられるからだ。一人ぼっちになって考え事をすることで、一人ぼっちの寂しさを忘れられるからだ。しかし、そうするとおかしいことになる。

ニコラは両親に会いたくて、一人ぼっちが嫌で塔を登ったのだ。そして、塔を登る事で自分は一人ぼっちではないと気付いたはずだった。なのに、彼はまだ丘が好きだった。きっと、村に帰ればまた丘に行き、一人で考え事をするだろう。そう、また一人ぼっちだ。自分は一人ぼっちではないと分かったはずなのに……。

ぐるぐると考えているうちに、ニコラは分かった。「周りは関係ない、自分が成長しなければいけないんだ」と……。今までも、決して一人ぼっちではなかった。しかし、ニコラは自分で自分を一人ぼっちにしていた。このまま、丘が好きなまま帰っても、何も変わ

らない。また自分を一人ぼっちにするだけだ。皆に両親がいるからではない。自分に両親がいないからではない。丘に逃げない強さが、一人ぼっちを恐らない強い心が、一人ぼっちにならないために必要なのだ。それを手に入れるにはどうすれば良いか？ その時ニコラに、方法は一つしか思い浮かばなかった。彼はランプをつけて、周りが少しだけ明るくなったのを確認すると、階段を登り始めた。五日目の朝すらまだやって来ていないというのに、諦めるにはまだ早すぎたのだ。

ニコラは最後の力をふりしぼって、闇の中らせん階段を登った。休憩もとらず、ただひたすらに登り続けた。足首はいよいよ赤黒く変色してきて、水を失った喉がヒューヒューと渴いた悲鳴を上げた。目の前は闇……あとどれだけ登れば良いのか？ ニコラにはもう検討もつかない。しかし、彼は登り続けた。登ることしか考えなかった。

そのまま、毛布の中で朝を迎え、そして光の中を下りていったらどんなに楽なことだろう？ しかしその先にあるのは、元いた場所だ。一人ぼっちの村だ。ニコラが帰りたい村はそこではなかった。みんながいる村だ。家に帰ればおじいさんがいて、学校に行けば先生や友達がいて、たまに両親から手紙がくる……そんな表面的なことではない。ニコラの心がみんなの心と共にある……そんな村に彼は帰りたいかった。いや、生まれて初めて行きたかった。そこに行くには、来た道を戻ってはダメなのだ。すなわち、登らなければならぬ。ニコラが求める場所は、果てしない闇の先にある。

「痛っ！」

バランスを崩して、ニコラは前のめりに倒れた。右足は、いよいよ踏ん張りが利かなくなってきた。脳が痛みを和らげるために神経を麻痺させたのか、足の感覚はほとんどなかった。ニコラは何とか立ち上がったが、足元はフラフラとしておぼつかない。数歩登った所で、彼はまた倒れてしまった。

しかし、ニコラは止まるわけには行かなかった。右足が言うことを聞かなくなつたぐらいで……と、彼は持っていたランプをリュックにくくりつけると、空いた手を地面についた。そして、ニコラはその手を「前足」に変えた。ワ二のように、四つの足で這いながら階段を登り始めたのだ。闇の中にうごめくシルエツトは、もう人間のものには見えないかもしれない。しかし、そんな見てくれないなことは、もうニコラにとってはどうでも良かった。いかに、見た目は人間から爬虫類に退化しても、彼はその精神を「弱虫なニコラ」の先に進化させたかつたのだから。今は、ただひたすら、全身に残る全ての力を使つて進むことが大切だった。

太陽は偉大だ。何十億年と言う長い時間、ずっと闇を払い続けているのだから。しかし、それに比べてニコラの背中にあつたランプは非力で、ついにその輝きを失つてしまった。ニコラの周りは完全に闇に閉ざされた。もう、目は頼りにならない。もつとも、光があつたとしても、喉の渇きと疲労によつてその視界はかすんでしまつていたが……。とにかく、彼は手探りで階段を登つた。柵があるから、誤つて塔の内側に落ちることは無いだろうが、しかし同時に、いよいよ本当に終わりも見えなくなつてしまつた。「はあはあ」と大きく息を吐きながら、彼は後どのぐらい這い続ければ天辺に着くのか？ 一段先でそれは終わるかもしれないし、一万段先かもしれない。分らない」は大きな不安となつて、闇の中に取り残された人間の心をズタズタにしてしまう。

しかし、ニコラの心は落ち着いていた。いや、それは「無」と言つても良いかもしれない。彼は闇に怯えることも、失つた光にすぐることもしなかつた。ただ、手の平で次の一段を探し出し、それを登つていった。それはニコラだけの世界で、そこにはもう塔すら存在していないようだった。ニコラは何もない場所を、ただ登り続けた。

しかし、予期せず、ニコラ一人の世界は終わりを告げた。彼の手の平をヒヤリとした感覚が襲つたからだ。いくら探しても、次の段

は無かった。あつたのは、彼の行く手を塞ぐ、「石よりも冷たい何か」だった。

「ゴンゴン！」

拳で叩いてみると、それはそんな音を立てた。それはどうも、鉄の板のようだった。這いつくばったままでは分らないので、ニコラは仕方なく立ち上がると、その鉄板に体重を預けてみた。すると、「ギイイ」と耳障りな音を立てながら、それは動いて、次の瞬間ヒュツと風が頬を撫でた。突然のことで、ニコラは思わずゾクツと身震いすると、自分の周りを目を凝らして見た。

ニコラが目にしたのは闇の中でキラキラと輝くもの……それは、星だった。そこは外だったのだ。星達を送ってくるわずかな光を頼りに後ろを振り返ると、ニコラは先ほどの鉄板が扉であったことを知った。そして目が慣れてくると、彼は今までずっと見続けてきたものが、そこには存在しないことに気付いた。そう、いくら探しても、上にのびる塔はもう無かった。

天辺だった。夢にまで見た、塔の天辺だった。

「着いたんだ……」

ニコラは呟くと、その場に腰を下ろし、そして星空を見上げた。とびきり感動するわけでもなかった、達成感もあり……。ただ疲れていて、風が冷たかった。何の感慨もない。世界で一番高い場所で見えた星空は、村で見るとあまり変わらなかった。そこは村から見れば遥か空の彼方なのだが、それでも、まだまだ空ではなかった。「神様ー！」

ふと思いついたので、ニコラはその名を呼んでみた。しかし、いくら待っても返事をする者はいないし、ニコラとしても、それは予想通りのことだった。ただ、一応「もしかしたら……」に決着を付けておきたかったのだ。これではつきりした。やはり、神様はおとぎの国の住人なのだ。

結局、その地上とも空ともつかない場所にいるのはニコラ一人だ

った。おじいさんも村のみんなも、彼の足元より遙か下で寝息を立てている。そして、星達は遙か上の方で瞬いている。そこでは、これといって考えるべきことも見当たらない。一人ぼっちを極めたような場所だった。そこはひどくつまらない所で、こんな所にいるのは「よほどの暇人」か「頭のおかしな奴」だろう……と、そう思いながら、ニコラはフツと笑った。こんなものにすがっていた自分が、情けなくて仕方なかった。彼は実際にこの塔に登ることで、やっとその馬鹿馬鹿しさに気が付いたのだ。

それから、彼はしばらく星空をながめながら、ぼーっとしていた。何を思うわけでもなく、星達が消えていくのを見ていた。そのうち、空の色はだんだんと青みがかって行き、そして最後は東の空に明星が一つだけ残されて、星達はみんな空に別れを告げてしまった。

「朝になつたら下りなきや……」

ニコラは、白み始めた空の端を見ながらつぶやいた。プカプカと浮いている紫色の東雲しのめは、次第に明るいオレンジ色に染まっていた。それと共に、空気もだんだんと暖かくなって、ニコラの体にも少しずつ元気が戻ってきた。夜通しずっと登ってきたのに、すごくさっぱりとした気分で、空を見つめる顔は爽やかだった。気力がみなぎっていた。ニコラはだいぶ明るくなってきた空に向かって「うーん」と一伸びすると、それから東の方を向いた。「朝日を見て帰ろう」と、そんなことを思いながら……。

そしてついに、ニコラの前に太陽が顔を出した。ニコラは眩しさに一瞬目を閉じたが、しかしゆっくりとまぶたを開けると、次の瞬間、目の前の光景に思わず息を呑んだ。闇に沈んでいた地上が、東の方から、ゆっくり、ゆっくりと色を取り戻していく。海は青、森は緑、町には赤や黄色や白……地の果てから、地の果てまで。それは、そこに住む多くの人々にとって、ただの一日の始まりにすぎなかっただろう。しかし、ニコラにとってそれは、世界の誕生にも思える光景だった。今まで塔ばかり見てきたが、しかし目の前の光景はそれとは比較にならないほど雄大で、そして美しかった。

太陽はその姿を完全にさらけ出した。そしてその光によって、地上もまたニコラの前に全てをさらけ出して見せる。ニコラは思わずあちこち景色をながめた。真下を見下ろせば、トゥーガ連峰やカノン・ダラー、そしてニコラの村が見えた。遠くには都も見えるし、海の向こうに浮く、行ったことのない島も見えた。東西南北、そう、北も南も、東も……。そして、ニコラは西を見た。海が見えた。そして、その向こう側には大陸が見えた。西の大陸……両親のいる場所だった。

「お父さん！ お母さん！」

聞こえるはずがないのに、ニコラは叫ばずにはいられなかった。不思議な感じだった。声も届かないほど遠くにあるのに、その場所はニコラの目の前なのだ。今まで、そこは遠い、想像もできないくらい遠い場所だった。教科書に載っていた地図で見たが、良く分かっていなかった。「自分がいる世界とは別の世界なのかもしれない」と、ニコラは何度も思った。しかし、今は目の前にあった。村も目の前だ。かつて住んでいた東の都も目の前だ。全部が一つの景色の中だった。ちゃんと、つながっていた。

それはつながりを持った、一つの世界……。

エピソード

丘の上に、一人の少年が座っていた。少年は最近この村に来たばかりで、友達も全然いない。同じ年頃の子供達が輪になって遊んでいるのに、彼はその中に入ることができず、逃げるように丘にやって来ては辺りの景色をながめていた。丘からの見晴らしは最高だった。風に揺れる緑の草木、流れる小川、北のトウガ連峰、そして天高くそびえる塔……。「あるものは、ある！」と教えられてきた塔だが、こうして改めて見ると不思議だった。

少年は考えた。あの塔はいつ、誰が、何のために建てたのか？ 考えたが、分からなかった。しかし、そうして考えていると寂しさを忘れられるので、少年はそのまま塔のことを考え続けた。

「塔のことを考えてるの？」

しかしその時、少年は不意に後ろから声をかけられた。振り返ると、そこには金色の髪が綺麗な、年も同じぐらいの男の子が立っていた。

「僕、あの塔に登ったことあるんだ。天辺までね……」

「え？」

男の子の言葉を聞いて、少年は驚いた。「あるものは、ある！」が当たり前のこの世の中で、まさか塔に登る人間がいるとは思ってもみなかったからだ。しかし、啞然とする少年に向かって、男の子は言葉を続けた。

「でもね、すぐつまらなかったよ。階段だけで、他は何も無いんだよ。村でみんなと遊んでいる方が面白いよ」

男の子はそう言うと、少年の手を取った。

「僕はニコラ。こっちに来てみんなと遊ぼうよ！」

終わり

エピローグ（後書き）

ここまで読んでくださった皆様
どうもありがとうございました。

楽しんでいただけたでしょうか？

少しでも心に残るものがあつたら嬉しい限りです。

書いていた私は、少し童心に返りました。

一人ぼっちが嫌いなのに、一人ぼっちになりたがる男の子……

どこかにこんな奴いたなあ、と思つたら自分でした。

もちろん、私は金髪じゃありませんが……。

話がそれましたね。

それでは最後にもう一度、

御愛読ありがとうございます。

そして、お疲れ様でした。

と、忘れてた。

この作品は「ムーンチャイルド企画」に参加していますので
よろしかったら同企画の他の作品も読んでみて下さい。

下のリンクからサイトに飛べます。

それでは、またどこかで……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3372e/>

ニコラと塔

2010年10月8日15時01分発行